

作田啓一の社会学的想像力

真 鍋 公 希

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 作田啓一は、生の経験の中にあらわれる非合理性を捉えるための理論体系の構築に一貫して取り組んだ社会学者である。先行研究では、彼の生の経験への関心が中心的に論じられてきた。しかし、作田の特徴は、生の経験への関心だけでなく、それとは矛盾するように思われがちな体系化への志向性をも兼ね備えている点にあるように思われる。この問題意識に基づき、本稿では作田の思想における理論の位置づけについて検討する。

本稿では、まず、『命題コレクション社会学』の付論に注目し、水平的関係と垂直的關係という二つの関係性を抽出する。続いて、現代社会学と小林秀雄に向けた作田の批判を検討し、批判の要点が、両者がともに、現実を水平的／垂直的關係に還元して論じようとする点にあることを明らかにする。最後に、作田の犯罪分析を取り上げ、彼が水平的關係と垂直的關係の両方を論じようとしていたことを指摘する。以上から、作田は社会学的な説明（水平的關係）と生の経験（垂直的關係）の二つを結びつけた理論的視座の構築を試みていたことを指摘し、その理論によって一つの「全体」を仮構していたと結論づける。

1 はじめに

社会学者、作田啓一。1959年から1985年まで京都大学の教養部で教鞭をとり、戦後の日本社会学を牽引した彼は、社会学のみならず精神分析や文学理論も積極的に取り入れながら、2016年に亡くなるまで、人間の生の経験の中にあらわれる非合理性を捉えるための理論体系を発展させ続けた。岡崎宏樹（2016）は、作田の仕事をついに三つの時期に分け、各時期で用いられる概念こそ大きく異なるが、この生の経験への関心は一貫していると指摘する。作田理論の変遷をひとことという、前期において行為の選択原理としての〈欲求充足の適切性〉で示唆されるに留まっていた生の経験が（作田 [1972] 2001）、ルソー研究を経た中期では「生成の世界」「溶解体験」「超個体我」といった概念によって明確な輪郭を与えられ（作田

1993, 1995）、後期にJ. ラカンの「現実界」概念が援用されることで前景化する（作田 2003, 2012）とまとめられるだろう。

この独自の理論体系は、それ自体が、学説史研究の対象として興味深いものといえる。しかし、ここでは彼の理論の内容ではなく、生の経験を捉えようとした彼が、常に体系化・理論化を目指し続けたことのほうに注目したい。というのも、丸山真男（1961）が論じた「理論信仰」と「実感信仰」の対立をはじめ、生の経験と抽象的な理論は相容れないものと思われることが多いからである。

[那須耕介]¹⁾ 特に、扱われている題材は、ふつうは言葉にできないだろうということ、たとえば文学作品のなかで示唆することしかできないようなことを、あえて概念で説明なさろうとしている。[……] 作田さんのお仕事にはある種の一貫性がある、一方ではア

メリカの社会学者パーソンズなどを読まれて、緻密なシステムというか体系をつくられるけれども、その一方で微妙なものに対するこだわりがある。(作田・鶴見 2006: 19-20)

作田と鶴見俊輔との対談に同席した那須耕介がこう評価するように、作田の特徴は、生の経験への着目だけではなく、生の経験と体系化という相容れないと思われがちな二つの志向性が併存しているところにあるのではないだろうか。事実、作田自身も、生の経験に即した体系の構築をテーマに掲げている。

これまでの社会学の理論体系は〔……〕「生きていること」自体の経験を大事にしている人々にとっては、自分たちに無縁の体系、空々しい体系と見えたのである。私もそのような人々の中の1人であって、長年のあいだ空虚な体系からの離脱を模索してきた。こういった人々の中には、体系というもの自体が本来的に空疎なものであると見なし、体系から離れ、その場限りのテーマをつぎつぎに選んで、物書きにいそしむ人もいる。しかし私は体系なるもの一般が本来的に空疎なのではなく、空疎でない体系もありうると信じてきた。〔……〕バルクソンの体系は決して空虚ではない。それは「生きていること」自体の経験から出発する体系だからである。私はいろいろの模索のあと、バルクソニズムを社会学に持ち込んで体系を作る試みに熱中し始めた。(作田 1993: i-ii)

非合理的な側面が表出する生の経験を、体系的に——一貫性をもった合理的な言葉で——語ること。作田の仕事の魅力をここに求めることができるのだとしたら、一貫して探求し続けた生の経験だけでなく、体系化への志向性もまた、彼の思想を理解するための重要な論点を構成するはずである。だが、既存研究では独特の概念を駆使した生の経験への関心が論じられることが多く、体系化への志向性については十分な議論がなされてこなかった²⁾。さらに、作田自身も、理論を構築

する意義については「なんかきちんとしていないと、きもちが悪い」や、「気にかかることについて、どうしてそうなんだろうと考え込む人と、どうしてかを考えるよりも表現したいという二通りの人がありますね。〔……〕僕はその中間です。そこには中間があってもいいし、自分にはそういう立場しかとりようがない」(作田・鶴見 2006: 20-1)と述べるにとどまり、十分には説明していない。

作田の思想における理論の位置づけに関しては、奥村隆(2016)の議論が示唆的だろう。奥村は見田宗介の「反転のラディカリズム」と対比させる形で、作田の方法を「残余のラディカリズム」と呼んでいる。見田が理論的図式によって「現実の『図』と『地』を一挙に反転させる」のに対し、作田はこうした反転を行わず、理論による「認識の編みから『こぼれ落ちるもの』があり、それをいつも発見・探求しようとする」(奥村 2016: 388)。理論を道具とし、間接的にそこから「こぼれ落ちる」生の経験を描き出すことが作田の方法であったというこの指摘は、たしかに、なぜ作田が体系化を志向しつづけたのかという問いに対する一つの答えを提示しているといえる。だが、この議論にしたがえば、見田の方法において地と図を反転させるための要の位置を占める理論は、作田の方法においては、生の経験を捉えるための参照点という控えめな役割しか果たすことができない。あくまで「こぼれ落ちる」ものこそが重要であるのだから、理論は最終的にはその無力さを宣告される。つまり、理論はあくまで手段として、目的である生の経験の外部に位置づけられることになるのだ。しかし、先の引用や、影とはいえ生の経験を名指す概念を構築して既存の概念と関連づけようとする作田の多くの仕事を踏まえるならば、作田にとっての理論には、参照点に還元できないより積極的な意義があるのではないだろうか。本稿の目的はこれを明らかにすることである。

その糸口として、まず、1986年刊行の『命題コレクション社会学』(以下、『命題』)に掲載された命題の選定理由である「面白さ」に照準を合わせる。『命題』には、作田による「社会学的命題の構造の分析」が付論として掲載されており、

選定理由となった「面白さ」について解説がなされている。命題の「面白さ」が体系化の意義に直結するわけではないとしても、命題はある社会的現実を抽象化して簡潔な形式にまとめたものであるから、体系化と同じ手続きを含んでいるといえるだろう。そのため、なぜ作田は体系化を志向し続けたのかという問題を解くための手掛かりを命題の「面白さ」に求めることは、ある程度の正当性をもつように思われる。第2節で詳述するが、この付論では、命題の諸要素の意味連関が水平的関係と垂直的關係の二つに分けられており、作田は、水平的関係に還元できない垂直的關係を含んだ命題をより高く評価している。

この命題への評価を確認したうえで、第3節では、作田が展開した二つの対象への批判を検討する。その二つとは、現代社会学と小林秀雄である。制度化された社会だけを論じる現代社会学と、生の経験を尊重する小林は、一見すると真逆の位置にあるようにみえる。しかし、第2節の議論を踏まえることで、作田が一貫した視点から両者を批判していたことがわかるだろう。

そして、実のところ、この視点は作田自身の現実分析にもみることができる。これを示すために、第4節では犯罪の動機に関する彼の分析を確認する。作田は生の経験の極限事例として犯罪を捉えていたが、それでも、そのすべてを生の経験によって説明しようとしたわけではない。作田の議論を追う際には、独特の概念による生の経験の説明に注目するあまり、この点を見落としてしまわないよう注意が必要だろう。以上の議論を通して、作田にとっての体系的な理論とは、残余を見つげ出す道具であるのみならず、残余をも含んだ一つの「全体」をつくり出すものでもあることを示す。

2 命題の「面白さ」

まず、作田は命題を視点命題と法則命題の二種類に分ける。「視点命題は一定のパースペクティブによって切り取られた事実についての言明であり、法則命題とは同様に一定のパースペクティブによって切り取られた事実の諸要素間の関係についての言明」(作田 [1986] 2011a: 414) である。

もちろん、法則命題もそれによって新しいパースペクティブを示すことができ、また、法則命題はある視点命題を前提としてもいる。この点で、両者を分節化することに疑問を抱く人もいるかもしれない。しかし、事象間の関係を示す法則命題は経験的な検証が可能であるのに対して、視点命題はパースペクティブそれ自体の真偽を問うことができない点で決定的に異なる。視点命題では、そのパースペクティブが説得的かどうかだけが問題なのだ。視点命題の例として「社会はそこに属する個人の総和以上のものである」という E. デュルケームの命題を、法則命題の例として「プロテスタンティズムの禁欲精神から近代資本主義が生まれた」という M. ウェーバーの命題を挙げることができる。

つづいて、作田は命題の「面白さ」を定義する。まずもって、命題の「面白さ」とは「意外性あるいは非自明性である」(作田 [1986] 2011a: 414)。空間的な比喩を使えば、意外性・非自明性とは、「XはYである」という命題における X と Y とのあいだの距離が大きいことを意味する。たとえば、「社会は有機体である」という命題における有機体(=Y)は、「社会は個人の集合である」という常識的な命題における個人の集合(=Y')に比べて、社会(=X)の意味の平面から離れている($XY' < XY$)。「社会は有機体である」という命題の意外性は、常識的な命題と比較した際に明らかとなるこの距離の大きさに由来する。このように考えると、X と Y との距離が大きければ大きいほど、意外性は増していくといえる。だが、もちろん単に距離が開いていれば「面白さ」が生じるわけではない。視点命題は論証を通して、法則命題は経験的なデータに即して、両者のあいだに対応関係があることを示す必要がある。つまり、「命題の面白さは意外性を必要条件とし、説得性を十分条件とする」(作田 [1986] 2011a: 414) のである。

命題の「面白さ」の条件が以上であるとしたときに、より複雑な視点命題と法則命題は、どのような「面白さ」のパターンをもちうるだろうか。作田によれば、次の二つが考えられる。第一に「パースペクティブと事実という二つの線あるい

はマトリックスのあいだの対応」であり、第二に「パースペクティブによって切り取られた事実のマトリックス上の諸要素間の関係」である（作田 [1986] 2011a: 415-6）。視点命題の「面白さ」が第一のパターンに、法則命題の「面白さ」が第二のパターンに当てはまる。この二種類のパターンを示したうえで、作田はさらに、第二のパターンを「(1) 事実のマトリックス上の諸要素が同じ層に属している場合（水平的関係）と、(2) それらが別の層に属している場合（垂直的關係）」（作田 [1986] 2011a: 416）の二つに分けて解説を進める。

水平的関係による「面白さ」は、潜在的機能に関する諸命題などにみることができる（作田 [1986] 2011a: 417-8）。たとえば、雨乞いという儀式は、当事者のパースペクティブにおいては、儀式の遂行 (a) と降雨 (x) とが関連するものと捉えられている。これに対して、観察者のパースペクティブからは、儀式の遂行 (a) による共同体の成員の結合の強化 (b) と心理的安心の回復 (c) という連関を見出すことができる。つまり、雨乞いの潜在的機能を指摘する命題は、ax 間が無関係であることを示すと同時に、abc 間の意外な関係を発見する点で「面白い」命題なのである。

こうした同一のマトリックス上の対応関係の発見は、当事者の予期と行為の結果が一致する場合であっても、それとは別の連関を見出すことができれば、やはり意外性をもつ。R. K. マートンの「預言の自己成就」はそうした命題である。後述するように、『命題』における「預言の自己成就」の部分を作田が担当していることもあって、付論ではこの連関を改めて解説していないが、敷衍すれば次のようになるだろう。アメリカでは、黒人は、団体交渉に慣れていないというに組合のコントロールを受け入れない (a) ために、スト破りをする (x) と思われていた時期があった。そして、この想定のために、当時の黒人は労働組合に加入できない (y) ことが一般的であった。しかしそうなる、実際にストライキが生じた際に、雇用者は当然、非組合員である黒人を雇おうとする (b) ことになる。こうして、「黒人はスト破りをする」という預言が現実化する。ただし、それは

白人が想定した ax 関係ではなく、組合の利益を守るために黒人を排除したことの意図せざる結果（＝潜在的機能）として、ybx 関係によって実現するのである。

それでは、垂直的關係における連関とは何か。作田は先述のウェーバーの命題を取り上げて解説する。プロテスタントの世俗内禁欲が資本の蓄積を促し、資本主義へと展開したと主張するこの命題は、「ピューリタンの禁欲的努力の潜在的機能を言い表しているとも見ることできる」（作田 [1986] 2011a: 418）。だが、この命題には水平的関係とは異なる次のような性質が含まれている。

ウェーバーの命題に登場するピューリタンは機能主義や象徴的相互作用派の命題に出てくる当事者とは異なって、それ自体が一つのマトリックスである。すなわち、それはパーソナリティ・システムであって、事実のマトリックス上の一点に過ぎない当事者（行為者）と区別される。[……] これに対して、機能主義などのパースペクティブによってとらえられた当事者（行為者）はパーソナリティ・システムではなく、その行為は社会的事実という一つのマトリックス上の一点 (a) として、他の諸点 (b や c) と対応しているにすぎない。[……] ウェーバーの命題に感じられる奥行の深さは、事実の層のこの二重性に基づくのであろう。（作田 [1986] 2011a: 418-9）

予定説を含んだ教義への誠実な信仰と、救いの確証を得たいという個人的・心理的な欲求との矛盾によって生じた葛藤が、ピューリタンたちを不断の禁欲的努力へと駆り立てていった。これはつまり、ピューリタンたちの振る舞いには社会的事実としての宗教規範に還元できない余剰性が含まれていることを意味している。この点において、パーソナリティ・システムとしてのピューリタンは、経済システムとしての近代資本主義やカルヴァン派の教義といった社会的事実と異なる位相に属するのである。このように、水平的関係が現象を一次的に説明するのに対し、垂直的關係は

複数の次元の対応を説明する。しかし、この論理構造の違い以上に注目すべきなのは、上記の引用では、水平的関係しか論じていない命題よりも、垂直的關係を含んだ命題のほうが「奥行の深さ」がある点で優れているという判断が暗示されていることである。この判断は、垂直的關係の解説の最後で再び「預言の自己成就」命題を取り上げ、潜在的機能とは次元の異なる意外性に言及することで、さらに明確となる。

同様の例として再びマートンの「預言の自己成就」命題を挙げることができる。ここでは預言の実現という出来事の連鎖のマトリックスに対応して「オイディプス王」に代表されるような神託の実現のマトリックスがあることが見いだされた。[……] われわれがマートンのこの命題に見出す面白さは、「存在と意識」のあいだの常識的な規定・被規定關係の逆転という面白さや、潜在的機能の発見の面白さに還元されえない。それらの上にもう一つの別の次元の意外性が加わる。それは預言の自己実現と神託の自己実現との対応である。(作田 [1986] 2011a: 420-1)

ここで言及されている神託の実現というマトリックスとの対応は、作田自身が担当した『命題』本文の「預言の自己成就」でも強調されている³⁾ (作田 [1986] 2011b)。当初は実在とかけ離れた情報にすぎなかった神託が、事態が進展するにつれて徐々に現実と重なっていくという「オイディプス王」の物語に、読者は驚きを感じる。この驚きを生む美学的な構造と「預言の自己成就」のプロセスが相同的なところに、この命題の「面白さ」がある⁴⁾。もし、この美学的法則との関連がなければ、「マートンの命題はそれほど魅力的ではなかったであろう」(作田 [1986] 2011b: 112)とする作田の評価は、初学者向けの教科書である『命題』の性質を踏まえれば、かなり強い主張とってよいだろう。さらに、『命題』を企画・準備するための第1回の研究会で作田が報告したテーマこそが「預言の自己成就」であったこと(井上 2011)を踏まえれば、現象のメカニズムと

美学的法則という異なる次元のあいだの対応が、作田の関心を強く引きつけていたのは明白である。

以上の議論をまとめておこう。作田は、ある社会的現実から引き出された法則命題の「面白さ」を水平的關係と垂直的關係に分け、後者⁵⁾により高い評価を与えていた⁶⁾。とはいえ、水平的關係の連関もまた「面白さ」を生み出しうるのであるから、垂直的關係に比して必ずしも不十分な意味連関とはいえないだろう。それでは、水平的關係と垂直的關係はどのような關係にあるのだろうか。これを検討するために、次節では作田が展開した真逆の立場にある二つの対象への批判を確認する。その二つとは、制度化された社会だけを論じる現代社会学と、生の経験を尊重する小林秀雄である。生の経験を重視する作田の立場を踏まえれば、現代社会学への批判は想像に難くないが、作田のいう「溶解体験」と同様の経験を重要視していた小林へも批判が展開されたことは、意外に思われるかもしれない。しかしながら、作田は一貫した視点から両者を批判しているのである。

3 一次元の議論への批判

3.1 現代社会学に向けられた批判

作田は、社会学が制度として確立され繁栄するにつれて、「社会学の創成期に見られた根本的な視点が失われてきた」(作田 1995: 73)と指摘する。そこでもっとも問題となるのは、社会学が想定する人間像をめぐる視点である。

一次元の存在として人間をとらえる社会学では、人間の浅い側面と深い側面、あるいは個体としての側面と個体を超えた側面といった、いわば立体的に人間をとらえる視点が失われてきましたから、その分だけおもしろくなくなってきている。[……]人間を二重存在としてとらえると、二つの存在のあいだに葛藤があったり、軋轢があったり、そういう点で非常にダイナミックな人間像が見えてきます。ところが現状では、世俗生活の中だけにどっぷりつかっている人間がすべてであり、そして世俗的な生活以外にはどこにも人間の本性

というものはないのだという見方が、二重存在としての人間の見方にとって代わりつつあるようです。(作田 1995: 73-4)

上記の引用は、前節の命題構造に即して次のようにいにかえることができるだろう。すなわち、「人間は一次元の存在である」あるいは「世俗的な生活以外に人間の本性はない」という視点命題が採用される現代社会学では、そこから抽出される事実の諸要素も一次元になり、水平的関係しか論じることができない。この結果、社会学の「面白さ」が失われている、と。したがって、作田はここでも、垂直的關係を捉えることに重きを置いている。というより、ここでは『命題』の補論以上に、水平的關係には低い評価しか与えられていない。

なぜ、人間を論じる際には、水平的關係への評価が低いものに留まるのか。この疑問は、中期の作田が定式化した生成／定着という二つの区別をみることで解決できるだろう。作田は、次のように定着の論理と生成の論理とを定義する。

この経験を知性の言葉で語ろうとすると、人はその経験をとらえそこなう。知性の言葉は分割 (division) の論理に従うからである。その論理は内界と外界とを分け、内界の持続を通過点の集合に置き換えてしまう。[……]だから、分割の論理を定着の論理と言い換えてもよい。[……] 体験はその経験を生きる主体の直観の記号でしか表現できない。直観の記号とは、たとえば詩の言葉、メロディやリズム、絵画の中の色彩や輪郭や構図などである。これらの記号表現の根底にある論理を仮に生成の論理と呼んでおこう。(作田 1993: 30)

二つの論理は、権利上は、世界に対してどちらを適用してもよい。ただし、その有効性には向き不向きがある(図1)。たとえば、自然科学の対象となる物質や、社会科学であれば政治や経済の制度などを分析するときは定着の論理が有効だが(右サイド)、生命や精神は定着の論理で捉えるこ

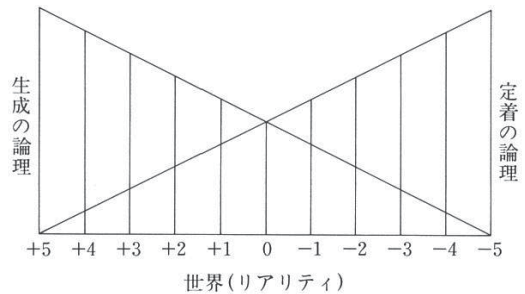


図1 世界と生成／定着の論理との関係 (作田 1993: 31)

とが難しい(左サイド)。

それでは、人間の「浅い側面」と「深い側面」は、定着／生成とどう対応するのか。もちろん、浅い側面を捉えるのが定着の論理であり、深い側面を捉えるのが生成の論理である。一例を挙げよう。C.W. ミルズは、ある場面で行為の動機を尋ねられた時、人々は相互行為を円滑に進めるために、社会的に共有された動機の語彙を使うと指摘した。ここでミルズが指摘した動機は表層の自己に属するものであり、社会的・制度的な規範との関連で説明できるものである(水平的關係)。しかし、人の本当の動機とは実はもっと複雑で、説明しようとするとなんとなく「ふと思いついたから」としか言えないようなものではないのか。作田はこちらの動機を深層の自己に属するものと理解する(作田 1995: 83-92)。深層の自己が抱く動機は、つまるところ社会化されていない動機であるから、現代社会学の視点でこれを捉えることは不可能なのである。

それでは、生成の世界に属する物事に対して、作田はどう向き合うのか。『『生きていること』それ自体を感じ、歌うだけなのか。それならばそれは詩作であって、知の仕事ではない』。作田が課題とするのは、「人間が非-知の領域〔≡生成の世界〕へ近づくまでの過程を明らかにすること」、あるいは、生成の世界に由来するものが「〈定着の世界〉へと制度化されてゆく過程をも探求すること」である(作田 1994: 152)。この課題の定式化は、社会的・制度的な次元(定着の世界)と、それとは異なる次元(生成の世界)に属する生の経験そのものを結びつけようとする試みだといいかえられるだろう。つまり、生成の社会学の中

心的な問いには、垂直的關係が含まれているのだ⁷⁾。命題一般において、水平的關係よりも垂直的關係に高い評価を与えがちだったのは、作田のこの問題意識に起因すると考えられる。

しかし、人間を一次元の存在と捉える現代社会学の視点が問題なのは、ただ単に、垂直的關係を欠いているからというわけではない。本来なら生成の論理でしか捉えられない知覚や動機、感情などでさえ、定着の論理で説明しつくすことができると考えている点こそが、問題なのである。作田が現代社会学に向ける批判の要諦はここにある。要するに、現代社会学が「面白さ」を失っているのは、社会現象を社会的・制度的な諸要素と社会化された表層の自我との水平的關係に還元してしまうからなのであり、作田は現代社会学によって明らかにされる水平的關係の意味連関そのものを否定しているわけではない。

〔作田〕一卵性双生児で生まれて、同じ環境で育っても、ちがうものはちがう。外側からの刺激だけでは説明できないものがある。内側からの力は、外側の力と合成して出てくるんですから、どちらかが一方的に決めたという説明は不可能なんですよ。〔……〕だからといって、社会的影響を絶対受けない人間がいるというような、空想的なことを言っているわけではない。(作田・鶴見 2006: 42)

社会からの影響と人間の内側から湧き上がるものの影響とが合わさって、現実の行為へと結実する。こうした前提に立つとき、現代社会学が明らかにする水平的關係と生成の社会学が明らかにしようとする垂直的關係は、相補的な位置にあるといわなければならない。水平的關係の意味連関が、垂直的關係の意味連関よりも説明力に劣るわけではないのだ。そして、このことは、作田の小林秀雄への批判をみることでより明確になるだろう。

3.2 小林秀雄に向けられた批判

作田と同様にドストエフスキーとベルクソンに強い影響を受け、生成の論理でしか捉えられそうにない自我の解体のような出来事を重視する小林

は、素朴に考えれば、作田と近い立場にいるようにみえる。そんな小林を、作田はどのように批判しているのか。

作田は、小林が語り得ぬものとして神聖視した自我の解体、日常的な自己の境界が消失してしまう経験を、西田幾多郎の概念を借りて〈純粹経験〉と呼んでいる。議論を進める前に、〈純粹経験〉と作田の「溶解体験」の異同について検討しておかなければならない。「溶解体験」とは、作田がルソー研究で確立した概念であり、「自己と外界とのあいだを区切る壁が、あたかも溶け去ってしまったかのように感じられる」(作田 [1980] 2010: 170) 経験である。このように、二つの概念の簡潔な定義はほとんど一致する。それに加え、以下の二つの点からも、〈純粹経験〉と「溶解体験」は同じ経験を指していると考えられる。第一に、作田が小林を論じているのは、『恥の文化再考』(1967) に再録された「『実感信仰』の構造」と『『純粹経験』の意味づけについて』および、『仮構の感動』(1990) に再録された「〈純粹経験〉について」の三本の論文だが、そのうちの二本が『ルソー』(1980) 以前の作品であること。第二に、「〈純粹経験〉について」では、〈純粹経験〉の例にイヨネスコの体験を挙げているが(作田 [1987] 1990: 213)、このイヨネスコの体験を、『生成の社会学をめざして』(1993) では溶解体験の例として引用している(作田 1993: 37-41) こと。これらに鑑みれば、小林秀雄を論じた三本の論文内での概念の一貫性を保つことを優先し、「溶解体験」概念の確立後であっても〈純粹経験〉を使い続けたと考えるのが自然だろう。

作田は、小林の主張を「自己分析の徹底による近代的自我の崩壊」と〈純粹経験〉における外界と自己との融合という二つの命題にまとめたうえで⁸⁾、この二つが異なる時間軸に属することを指摘する。前者は「歴史的、水平的な時間の軸に属している」のに対し、後者は「超歴史的、垂直的な時間の軸に属している」(作田 [1987] 1990: 213)。にもかかわらず、小林はこれらが属する時間の違いを区別しなかった。「小林の決定的な誤謬はこの二つの命題が異なった時間軸に属していることを認めようとしなかった点にある」(作田

[1987] 1990: 213-4).

この時間軸の違いを区別しないために、小林は自我の解体という現象だけを取り出して、この二つの命題を短絡させる。さらにいえば、〈純粹経験〉は「自己分析の徹底による近代的自我の崩壊」だけでなく、当人の置かれた状況や国家・民族、あるいは情緒主義的なイデオロギーとも無批判に、そして非論理的に重ね合わされてしまう(作田 [1965] 1967, [1966] 1967)。小林の議論では、「〈純粹経験〉が自由自在に動くメタファーの車に乗って、とんでもないところまで移動」(作田 [1987] 1990: 222)する。いくら〈純粹経験〉が超歴史的・普遍的な経験とはいえ、現実の体験は、それぞれの状況に置かれた歴史的・社会的条件によっても形づくられるはずである。小林は、そうした歴史的・社会的条件を全く考慮しないために、結果として「歴史に対する責任の問題が、彼の視野から完全に抜け落ちてしまった」(作田 [1987] 1990: 214)。

小林がどんなに力説しても、歴史的事実とは水平的時間の軸上において他の諸事実と因果的に連関し合っているものである。一方、この因果の連鎖をこえて成立する事実の重みというものが確かにあって、その重みは超歴史的、垂直的時間の軸上にある。事実の探求はこの二つの時間軸の交錯する地点において為されなければならないのに、小林は水平的時間軸のパースペクティブを切り捨ててしまう。だから、彼の考えている歴史は歴史ではない。(作田 [1987] 1990: 219)

以上のような作田の批判において、歴史的・水平的な時間軸がこれまでの概念でいえば定着の論理および水平的関係に、超歴史的・垂直的な時間軸が生成の論理および垂直的關係に、それぞれ対応することは明らかだろう。この対応関係から、〈純粹経験〉をひたすら重要視し、歴史的・水平的な時間軸を無視する小林の態度は、前項で確認した現代社会学と対照的なものだとわかる。すなわち、水平的関係だけを捉えようとする現代社会学には奥行きを伴った「面白さ」がないのに対し、

小林の議論は超歴史的な次元のみに注目することで、水平的関係の広がりの中に具体的な体験を位置づけようとしなない。現代社会学は定着の論理による還元主義に、小林は生成の論理による還元主義に陥っているのだ。「事実の探求はこの二つの時間軸の交錯する地点において為されなければならない」のに、両者の議論はともにいずれか片方の関係が欠けてしまっている。以上の議論から明らかのように、作田は定着／生成や水平的関係／垂直的關係の一方の視点から他方を批判しているのではなく、むしろ一方の視点に固執することを批判しているのである⁹⁾。

4 犯罪の動機と作田の視点

これまでの議論から、同じ次元に属する諸要素のあいだの水平的関係と、異なる次元に属する諸要素のあいだの垂直的關係とが区別され、現代社会学の論理構造が前者と、小林の論理構造が後者と、それぞれ対応することが示された。そして、作田が両者に向けた批判では、このうちのいずれかを欠いた還元主義に陥ることが問題とされていた。生成／定着の二つの側面は、事実の探求を進めるうえで相補的な関係にある。では、この二つは、現実にはどのようにして相補的な関係を結ぶのか。本節では、作田による犯罪の動機分析を例に、この問題を検討する。

だがその前に、単に生の経験を捉えるだけであれば、知性によって分節化を進める学問の言葉よりも、音楽や詩のような芸術による象徴化のほうが適切であるということを、もう一度思い出しておこう。「科学の立場に立つなら、生成の世界を定着の概念により影としてとらえたうえで、その影から生成のリアリティを構成し直すほかはない」(作田 1993: 35)と作田がいうように、論理的に一貫性をもった科学の言葉では、生の経験は間接的にしか捉えることができない。では、それなのになぜ、学問の言葉によって生の経験に回りがどくアプローチしなければならないのだろうか。これを考えるためには、問いを反転させるのがいいだろう。すなわち、仮に芸術による象徴化によって生の経験をうまく捉えることができたとして、

それでもなお残る問いとは何であろうか。作田によれば、それは、ある出来事が「どうしてそうなっているのか」という問い（作田・鶴見 2006: 21）である。

非合理的な生の経験は、たしかに歴史的・水平的関係では捉えられない超歴史的な何かに突き動かされて成立する。芸術はその何かを象徴化によって捉え、他者による追体験を可能にし、時にはマイナスの経験をプラスに移し替えることさえできる（作田 [1977] 1990）。しかし、超歴史的な何かに突き動かされた結果の行為が、どのような形態で現実化したのかを、芸術は説明できない。マイナスをプラスに反転することさえ可能な芸術的象徴化にとって、現実の行為がいかなる形態だったかということは、もはや問題にならないからだ。何かに突き動かされた結果として現実化する行為は、善にも悪にもなりうる。何かに突き動かされた瞬間の衝動を捉えられるのは、生成の論理を用いた芸術だけだろう。しかし、現実化した行為が善になったか、悪になったかを説明するためには、定着の論理が必要になってくる。つまり、生成の論理が行為へと突き動かす力を捉えるのに対し、定着の論理はその力がどのように方向づけられたのかを捉えるのである。

したがって、ある行為を説明するためには、社会的な要因による水平的関係の連関も明示しなければならない。実際、作田は「不特定多数を狙う犯罪」という論考で、1990年代以降の5件の無差別大量殺傷事件を論じる際に、まずは、その社会的要因として、人格を価値づけるシステムの一元化という「社会学者らしい」説明を行っている。

今日、自由競争の原理を社会のあらゆる領域に貫徹させようとする新自由主義が勢いを増してきた。それと共に競争における失敗はすべて本人の責任だとする社会意識も強まってきた。そのために、低い階層に所属する人々は、周囲から単に失敗者と見られるだけでなく、道徳的にも非難されそうな雰囲気の中に置かれる。そこで彼／彼女らは成層化システムへの反発と服従の一層強いアンビヴァレンスに陥るのである。〔……〕しかし今日

において、低い階層の人々の被阻害感をもたらす社会的要因はもう一つある。それは労働する人間主体が労働過程を通じてトータルな人間存在から切り離されるという、いわゆる労働からの疎外が、いっそう進行したことである。（作田 [2009] 2012: 218-9）

作田が取り上げた5件のうち4件の加害者は、社会的地位の低い職業に従事せざるをえない状況に置かれていた。したがって、ここで挙げられた社会的要因が彼らを大量殺人へと方向づけていったと考えるのは、ある程度は妥当な解釈だろう。そして、このような水平的関係（社会的状況と其中で個人が置かれた地位）による解釈を行った後に、作田は犯行の直前の動機について考察を進める。

この種の破壊行動の極端なおぞましさを前にした時、人は、加害者たちを最終的に動かすものは、破壊に行き着く個々の動機を超えて、いわば破壊そのものをめざすといった動機ではないかという問を課せられているように感じる。〔……〕では、彼らは何を破壊しようとするのか。表面的にはもちろん犠牲者である。だが、彼らは犠牲者の破壊というバネを用いて、彼らがかろうじて維持してきた社会あるいは象徴的世界とのつながりを破壊しようとしたのだ。このつながりの破壊を通して、彼は社会あるいは象徴的世界から脱出する。何処へ向かって？無の世界（ここで世界という言葉を用いることが許されるならば）へ、である。（作田 [2009] 2012: 222-3）

このように、作田は水平的関係を一通り考察し終えてから、生成の論理でしか捉えられないであろう問題に接近しようとする。また、同じく『現実界の探偵』（2012）に収録された「対象不特定の報復」では前述の無差別大量殺傷事件に加えて児童虐待や2005年の秋に起きたパリ郊外での暴動を論じているが、そこでもその要因として、児童虐待の場合は「経済的困難」や「個人主義という文化環境」（作田 [2011] 2012: 236-44）、パリの

暴動の場合も慢性の失業状態のような社会格差(作田 [2011] 2012: 244-9)を挙げている。「あらゆる犯罪行為は〔……〕現実的なもの(リアル)へのかかわりを最終の動機づけとしており、その意味で非合理性を帯びている。その中において対象不特定の報復である犯罪やそれに類する行為は、その非合理性が目立つという点で、リアルへのかかわりがとりわけ深い」(作田 [2011] 2012: 231)からこそ、作田はこれらの犯罪を取り上げたのだった。であるならば、これらの論考では、制度的な視点とは異なる説明を中心的に展開してもよいはずである。しかし、実際には——実証的とはいえないが——穏当な「社会学的」説明が行われているのだ。ここからも、作田が水平的関係・定着の論理を軽視していないことが読み取れる。

とはいえ、おそらく作田の犯罪分析の中でもっとも有名な「酒鬼薔薇少年の欲動」はどうかという疑問をもつ人も多いだろう。議論を進める前に、この論考に関する本稿の立場を示しておこう。たしかに、この論考では先ほど指摘したような「社会学的」説明はほとんどなされておらず、欲動を中心とした生成の社会学の視点からの解釈が展開されている。しかし、注意しなければならないのは、作田が酒鬼薔薇少年を「特別の人間」だと述べていることである(作田 [1998] 2003)。ここでいう「特別の人間」とは、平均的な人々よりも心の深い層が社会化されていない人間、図1でいえば左サイドに位置づけられる人間を意味する。つまり、酒鬼薔薇少年は一つの極限事例なのである。この事件は、ドストエフスキーの小説と同様に、社会化されない生^{なま}の力、ほとんど純粋ともいえる非合理性を私たちの目の前に突きつけてくる。それゆえ、この事件に関しては「社会学的」説明をする必要がないのだ¹⁰⁾。しかし、多くの出来事の場合、こうした非合理性はさまざまな社会的拘束と絡み合って表出する。したがって、現実の出来事を分析する際、その多くの場合では社会的次元からの説明を無視することは難しい。定着の論理による「社会学的」説明について検討し、それでは説明できないものを見つけ出す必要があるのだ。

この作田の態度こそ、奥村(2016)が「残余のラディカリズム」と呼んだものであった。「残余のラディカリズム」は、水平的関係と垂直的關係の両方を射程に入れようとする視点によってはじめて可能になるといえる。なぜなら、水平的関係しか捉えられない現代社会学の視点からでは、「こぼれ落ちる」ものがあることを認識できず、垂直的關係しか見ようとしない小林のような視点からみれば、そもそも「こぼれ落ちる」ものなど存在しないからだ。作田にとっての「謎」は、小林にとっては本質的で運命的なものとして明晰に体験されるだけである。ただし、本節で論じてきたとおり、社会的な次元の意味連関を明らかにする水平的関係をめぐる議論は、犯人を突き動かす衝動を論じる垂直的關係を見つけ出すための前座にすぎないわけではない。二つの関係は相補的なものであり、それぞれが現実を異なる形で説明できるのである。

したがって、作田が構築しようとした理論体系は、この二つの関係がどのように結びつき、行為として具現化するかを論じるために必要だったと結論づけられるだろう¹¹⁾。生の経験そのものは、体系的な論理を使おうとする限り、どこまでいっても「こぼれ落ちる」かもしれないが、そうした外部があるということ自体は、体系的に語りうる。いや、むしろ体系的に語らなければならない。「パースペクティヴを確立する」(作田 1997: 153)ためには、その視点命題の正しさを論証によって示す必要があるからだ。体系化への志向性には、社会的なものと超個人的なものを結びつけて理解しようとする作田啓一の「社会学的想像力」が表れているのである。

5 おわりに

作田は学生運動を一つの文化運動、思想運動と捉え、そのなかに「目的と手段とを機械的につなぎ合わせるのではなくて、手段にあたる項目を全体の徴表として組入れてゆく全体性への志向」を読み取りつつ、全体性とはそもそもが「非現実的なもの、イメージナルなもの」(作田 [1969] 1973: 75-6)であると論じている。

全体的なものはこの世のどこにも存在しえない。全体とは非日常的なものである。非日常性を日常の世界に持込む場合、非日常性が日常性に翻訳されたことになる。その翻訳は、事柄の本性上、完全では決してありえない。翻訳のまずさを苦しみとともにかみしめ、もっと巧い翻訳の方法をたえず探求することなしには、日常的世界の中での非日常的な営為は、たちまち頹廢に陥ってしまう。(作田 [1969] 1973: 75-6)

日常性への翻訳は常に失敗し、そこから「こぼれ落ちる」ものがある。ここにも作田の「残余のラディカリズム」が端的に表れているわけだが、注目したいのは、日常性に翻訳できる部分と翻訳できない部分の二つを含めた「全体」が、そもそも「この世のどこにも存在しえない」ことである。本稿のこれまでの議論と照らし合わせるならば、翻訳できる部分が水平的関係・定着の論理に、翻訳できずに「こぼれ落ちる」部分が垂直の関係・生成の論理に対応するのは明らかだろう。したがって、この二つを結びつけようとした視点である作田の理論は、まさに出来事の「全体」を視野に入れるためのものといえる。

そして、完全ではありえないからこそ、「もっと巧い翻訳の方法」は絶え間なく探求されつづける。これもまた、理論体系を何度もつくり直した作田の仕事と一致する。だが、こうしたつくり直しの過程を踏まえるならば、理論は「全体」を視野に入れるためというよりも、むしろ一つの「全体」を仮構するためのものだったというほうが適切かもしれない。なぜなら、「こぼれ落ちる」ものが「生成の世界」や「現実界」といった概念で名指され、一つの「徴表」として理論に組み入れられることではじめて、非現実的な「全体」がおぼろげながらも像を結ぶからである。そうであるならば、矛盾するかにみえる生の経験への関心と体系化への志向性は、作田の思想においては、非日常的な「全体」を追求する過程の二つの側面として、表裏一体の関係にあったといえるだろう。

注

- 1) 以下、引用文中の〔 〕は引用者注を意味する。
- 2) 代表的な作田研究としては、奥村編 (2016) のほか、小丸超 (2006) や佐藤裕亮 (2015, 2017) が挙げられる。また、こうした学説史研究とは別に、作田が捉えようとした生の経験を、作田とは異なる形で社会理論に組み込もうとする試みも存在する (高橋 1999, 2007)。
- 3) 正確に言えば、作田はこの命題の第一の「面白さ」として、素朴なリアリズムの否定——存在が意識を規定するのではなく意識が存在を規定することを示した点——という科学的法則を、第二の「面白さ」として美学的法則との対応を、そして第三に、この二つの交点として潜在的機能を挙げている (作田 [1986] 2011b)。
- 4) 文学作品での発見を社会学の理論に転換しようとする「文学からの社会学」の試みは、この点を展開しようとするものであったといえる (作田 1981; 作田・富永編 1984)。
- 5) ウェーバーの命題における垂直的關係が、禁欲的努力という行為と心理的葛藤という要素間の結びつきであるのに対して、「予言の自己成就」における垂直的關係は、預言—行為—帰結という要素間の連関が社会的次元と美学的次元に対応している点で、二つの命題における垂直的關係の構造は異なっているともいえるが、作田はこの区別については言及していない。また、作田はこの二つのほかに、E. フロムの「自由からの逃走」と谷泰によるキリストと去勢羊の相同性を例として挙げているが、前者はウェーバーの命題と、後者は「予言の自己成就」と同様の論理構造となっている。
- 6) この垂直的關係の「面白さ」は、作田の論じる芸術の創造や科学的な発見の喜びとも同型をなしている (作田 [1977] 1990)。芸術作品を制作するときの楽しみは、ある瞬間に経験した生命感を外的な表象システムに移し替えることに起因する。他の動物も生命感を感じる瞬間はあるかもしれないが、外的対象への移し替えを行うのはおそらく人間だけだろう。ところで、湯川秀樹が李白の詩から素粒子の理論を思いついたということを耳にすると、私たちは彼のひらめきを追体験して知的感動を覚える。この種の知的感動と、芸術を制作する際の感動は類似した性質をもっているといえる。「二つの相互に次元を異にしたシステムが、どこかの点で合一する時、私たちは一種特有の感情を体験する」(作田 [1977] 1990: 4)。科学と芸術がもつ創造あるいは発見の喜びは、二つのシステムのあいだの移し替えという共通のメカニズムによって生じるのである。
- 7) ただし、垂直的關係は、制度とパーソナリティとの関係や社会的事実と美学的法則との関係など、複数の異なる次元を結びつけた一般的なパターンなので、生成の社会学の中心的な問いに含まれる垂直的關係は、そのパリエーションの一つといえる。

- 8) 作田は、時期や論じる対象の違いを越えて、小林の主張の核心をここに求めているが、彼が小林の著作を集中して読んでいたのは「昭和十年代の終わり頃まで」で、その後は時おり手に取る程度だったようである(作田[1987]1990:211-3)。
- 9) これを踏まえると、ウェーバーの命題に「奥行の深さ」を感じ、「預言の自己成就」が魅力的だと論じる理由は、単に垂直的関係を重視しているからというよりも、これらの命題が水平的関係と垂直的関係の両方を含んでいるからというほうが適切だろう。
- 10) 後期の作田による犯罪分析として、ほかに「空虚感からの脱出」がある。この論考は「酒鬼薔薇少年の欲動」に近い議論が展開されているが、最終節では制度的な布置として「目的-手段図式の複雑化」「状況を支配する規則の複雑化」「対人関係の非人格化」「社会的価値による階層化」が挙げられており(作田[2003]2003:291-3)、やはり社会的次元による説明も展開している。
- 11) この作田の分析では、水平的関係と垂直的関係はそれぞれ、行為の方向づけと誘発要因として位置づけられる。だが、もちろん二つの関係の結びつきのありようはこれだけではない。たとえば、諸芸術システムにおいて、革新的な作品が登場することで美などをめぐる既存の定義が動揺し、次第に新しい定義が正統性を獲得していくプロセスには、垂直的関係(作品が与えた衝撃)と水平的関係(新しい定義の制度化)の別の結びつき方が含まれているように思われる。また、高橋(2007)の「体験選択」概念も、出来事の瞬間だけでなくより長い時間幅での行為の動機づけを扱える点で、作田が示したのとは異なる二つの関係の連関が想定されているといえるだろう。以上のように、作田が示したのとは異なる二つの結びつきのありようを個々の事象に寄り添いながら精緻に分析する仕事は、我々に残された課題の一つである。

文 献

- 井上俊, 2011, 「文庫版へのあとがき」作田啓一・井上俊編『命題コレクション社会学』筑摩書房, 423-5.
- 岡崎宏樹, 2016, 「〈リアル〉の探求——作田啓一の生成の思想」奥村隆編『作田啓一 vs. 見田宗介』弘文社, 258-310.
- 奥村隆, 2016, 「反転と残余——ふたつの「自我の社会学」におけるふたつのラディカリズム」奥村隆編『作田啓一 vs. 見田宗介』弘文社, 258-311.
- 奥村隆編, 2016, 『作田啓一 vs. 見田宗介』弘文社.
- 小丸超, 2006, 「生成の社会学の生成過程——作田社会学研究序説」『龍谷大学大学院研究紀要: 社会学・社会福祉学』(13): 37-56.
- 作田啓一, [1965] 1967, 「『実感信仰』の構造——小林秀雄をめぐって」『恥の文化再考』筑摩書房, 187-214.
- , [1966] 1967, 「『純粹経験』の意味づけについて——岡潔・小林秀雄『対話・人間の建設』の批判」『恥の文化再考』筑摩書房, 215-32.
- , [1969] 1973, 「管理社会と学生運動」『深層社会の点描』筑摩書房, 62-81.
- , [1972] 2001, 『価値の社会学』岩波書店.
- , [1977] 1990, 「知的感動と芸術的感動」『仮構の感動——人間学の探求』筑摩書房, 3-6.
- , [1980] 2010, 『ルソー——市民と個人』白水社.
- , 1981, 『個人主義の運命——近代小説と社会学』岩波書店.
- , [1986] 2011a, 「付論 社会学的命題の構造的分析」作田啓一・井上俊編『命題コレクション社会学』筑摩書房, 409-21.
- , [1986] 2011b, 「預言の自己成就」作田啓一・井上俊編『命題コレクション社会学』筑摩書房, 107-13.
- , [1987] 1990, 「〈純粹経験〉について——小林秀雄」『仮構の感動——人間学の探求』筑摩書房, 211-22.
- , 1993, 『生成の社会学をめざして——価値観と性格』有斐閣.
- , 1994, 「書評に依て」『ソシオロジ』38(3): 151-4.
- , 1995, 『三次元の間——生成の思想を語る』行路社.
- , 1997, 「書評に依て」『ソシオロジ』42(1): 151-4.
- , [1998] 2003, 「酒鬼薔薇少年の欲動」『生の欲動——神経症から倒錯へ』みすず書房, 5-31.
- , [2003] 2003, 「空虚感からの脱出」『生の欲動——神経症から倒錯へ』みすず書房, 249-93.
- , 2003, 『生の欲動——神経症から倒錯へ』みすず書房.
- , [2009] 2012, 「不特定多数を狙う犯罪」『現実界の探偵——文学と探偵』白水社, 197-228.
- , [2011] 2012, 「対象不特定の報復」『現実界の探偵——文学と探偵』白水社, 229-51.
- , 2012, 『現実界の探偵——文学と探偵』白水社.
- 作田啓一・富永茂樹編, 1984, 『自尊と懐疑——文芸社会学をめざして』筑摩書房.
- 作田啓一・鶴見俊輔, 2006, 『作田啓一 欲動を考える』編集グループ〈SURE〉.
- 佐藤裕亮, 2015, 「作田啓一における「羞恥」概念の検討——連帯のための切断へ」『境界を越えて: 比較文明学の現在: 立教比較文明学紀要』(15): 81-106.
- , 2017, 「作田啓一における「放心」概念の検討——直線的時間の脱臼と同一性の解体」『社会学研究科年報』(24): 31-42.
- 高橋由典, 1999, 『社会学講義——感情論の視点』世

界思想社.
———. 2007. 『行為論的思考——体験選択と社会

学』ミネルヴァ書房.
丸山真男, 1961. 『日本の思想』岩波書店.

Keiichi Sakuta's Sociological Imagination

Koki MANABE

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary Keiichi Sakuta is a sociologist who has consistently worked on the construction of social theory to try and understand the irrationality that appears in experiences of life. It is often said that unique experiences of life are inconsistent with abstract theory; nevertheless, he attempted to integrate them. However, previous studies have discussed only his interest in experiences of life, and little attention has been paid to his intention of constructing theory. This paper focuses on his intention to construct theory and discusses the significance of his doing so to understand experiences of life.

First, two concepts in “Collection of Sociological Propositions”, horizontal relationship and vertical relationship, are defined. Second, his criticism of contemporary sociology and Kobayashi Hideo are summarized. He claims that from a sociological or Kobayashi's perspective the complexity of the world is reduced to either a horizontal or a vertical relationship. Finally, his analyses of atrocious crimes are reviewed. He attempts to understand irrational crimes from the perspective of both horizontal and vertical relationships. Accordingly, it becomes clear that he has constructed a “whole” by connecting the sociological explanation (horizontal relationship) with the irrationality of life (vertical relationship).